

〔カルチャー報告3〕

進駐軍時代のジャズ 丸の内・銀座

はじめに

筆者は、大正・昭和初期から戦後の東京の社会・風俗、文化の一端を担ったポピュラー音楽、なかでもジャズを中心に、当時流行した曲の演奏と、ミュージシャンへのインタビュを交えたレクチャーで構成する講座、「ライブ&レクチャー ジャズと東京」(以下「ジャズと東京」)を1999(平成11)年から年1回江戸東京博物館ホールで行っている。ここ数年は、進駐軍時代(1945年9月から1952年前後)のジャズと東京について、さまざまな角度から特集してきた。ここでは、「ジャズと東京ⅣⅧ」の配布資料を中心に、戦前・戦後の東京におけるジャズ文化の背景を概観するとともに進駐軍時代の丸の内周辺地域の施設の接收状況を検討し、さらに「ジャズと東京」にゲスト出演していただいたミュージシャンの体験談によって、当時のジャズシーンを知る足がかりとしたい。

戦前・戦後の東京とジャズのかかわり

(1) 戦前の東京とジャズ

アメリカのポピュラー音楽であったジャズは、1918年(大正7)ごろ、太平洋航路の船のバンドによって初めて日本にもたらされ、折からの社交ダンスブームによって東京・大阪など都市部にひ

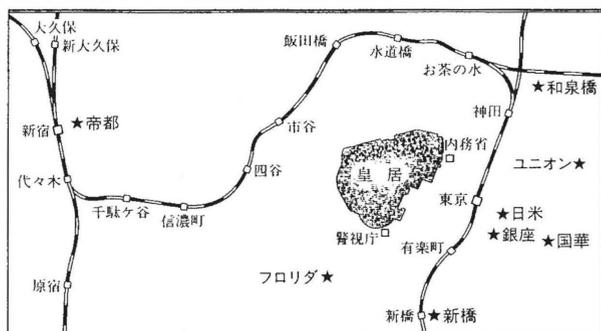


図1 昭和初期の東京8大ホールの分布
永井良和『社交ダンスと日本人』より

表1 東京市内「8大ホール」一覧(1936年12月調べ)

名称	所在地	フロア坪数	客席坪数	ダンサー
和泉橋	神田区岩本町	18(坪)	50(坪)	85(名)
銀座	京橋区京橋	100	30	130
国華	京橋区八丁堀	110	35	90
新橋	芝区新橋	79	20	55
帝都	四谷区新宿	100	46	110
日米	京橋区京橋	72	30	54
フロリダ	赤坂区溜池	60	70	90
ユニオン	日本橋区人形町	90	77	70

永井良和『社交ダンスと日本人』より

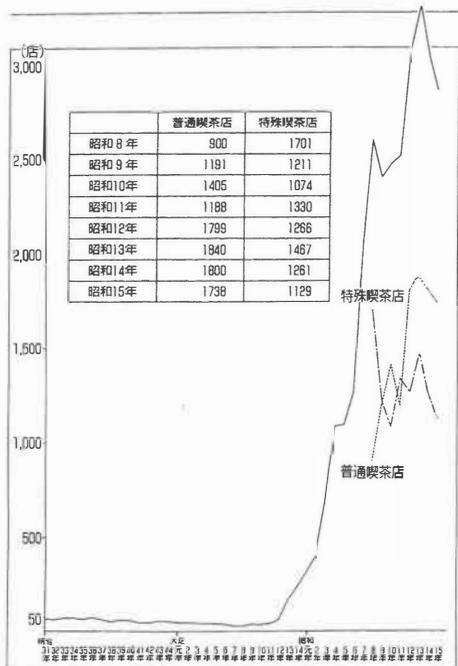
* 松井かおる

ろがっていった(1)。大正末期から昭和初期にかけて東京には大小のダンスホールが20カ所以上開場し、その後警察の取り締まり等により、1930年代を通して8大ホール(図1・表1)が生き残り、隆盛をきわめた。こうしたダンスホールでは専属のバンドにより、最新流行のジャズやタンゴなどが演奏された(2)。

また、大正期、大衆娯楽として定着しつつあった無声映画(当時は活動写真)の伴奏音楽(3)にも、しだいにジャズが用いられるようになり、幕間にはバンドのジャズ演奏がアトラクションとして組まれることもあった。さらに、1920年代末から1930年代にかけて、宝塚・松竹の少女歌劇、エノケンこと榎本健一らの劇団をはじめとする中小のレビュー団によるレビューが流行し、これらの専属バンドが、ハリウッド映画で評判となった曲など数々のジャズ・ナンバーを編曲・演奏して人気を得た(4)。

その他、銀座・浅草をはじめとする盛り場のカフェーや喫茶店で流すレコード音楽もジャズやタンゴ、シャンソンなどの洋楽が多かった。カフェーは、室内装飾や飲食物、音楽によって欧米の雰囲気を楽しむ場として明治末期に登場し、最初は文化人のサロンとなっていたが、次第に俗化し、関東大震災後は女給目当てに男性客が通う酒場となった。1929年の警視庁の統計によれば、カフェーは東京市内に6187軒あり、そこに働く女給は1万3849人を数えた(5)。この年、菊地寛の雑誌連載小説を溝口健二が映画化した「東京行進曲」の主題歌(作詞・西条八十、作曲・中山晋平)が発売されて25万枚を売り上げる大ヒットとなったが、東京市内のダン

表2 東京(旧市部)の喫茶店の変遷「東京市統計表」より



初田亨『カフェーと喫茶店 モダン都市のたまり場』より

スホールやカフェーでは、この曲の歌詞をながら「ジャズで踊ってリキユールで更け」る日々であった(6)。一方、東京市内の喫茶店では、東京市統計年表によれば、明治30年代から大正年間まで50軒前後で推移していたが、1925年(大正14)から急速にその数を増した(7)。(表2)。このなかでレコード鑑賞を主とする「音楽喫茶」は、音楽研究家の細川周平によれば、(1)レコード、(2)オーディオ、(3)喫茶ガール、(4)外装と内装の4元素からなっているという。また、喫茶ガールは客のリクエストを受けたり飲み物を出す「喫茶ガール」(女給と同じ従業婦待遇)とレコードをかける「レコード嬢」(事務員待遇)に分かれていた(マイク 上掲書)。この説を裏づける記事が『月刊エノケン』(8)にある。数回連載された武智豊子(劇団の人気女優)のコラム「喫茶店哲学」のなかで、

など女優5名とともに菊谷榮脚本の番組「ジャズ小唄万歳」に出演している。

しかし、日中戦争の激化により世情は緊迫し、風俗取り締まりが強化された。1938年2月、警視庁は盛り場でサボる「不良」学生を多数検挙し⁽¹²⁾、ダンスホールは1940年10月末で一斉閉鎖となった。ミュージシャンやダンサーはその後も営業を続けた満州のダンスホールをめざして大陸に渡るか、軍の慰問部隊として戦地を巡る以外は廃業せざるをえなかった。また1941年12月8日の対米英宣戦布告後、政府は米英音楽を敵性とみなし、米英作曲家の作品の演奏及びレコード販売が禁止された。さらに戦局が厳しくなつた1943年1月には、政府は米英文化の撲滅を提唱し、その具体的措置として、米英音楽レコード（クラシック、ポピュラーを含む）千余枚のリストを作成し、該当のレコードを供出させた⁽¹³⁾。こうして、東京に流れていたジャズは、それを楽しむ場とともに、歴史の表舞台から姿を消した。

(2) 戦後のTOKYOとジャズ

1944年11月から翌年8月にかけて東京は連日米軍による空襲にさらされ、各地が焦土と化した。銀座も例外ではなく、一丁目から六丁目まで2回の爆撃に遭い、瓦礫の街となった。七、八丁目も空襲による延焼を防ぐため、「建物疎開」と称して店舗や住宅が解体され、空き地が目立った（図3）⁽¹⁴⁾。一方、東京駅舎のドーム部

分が3月10日の空襲で焼失したが、丸の内のビジネスセンター街は焼け残った。

1945年8月15日、終戦の詔勅が下され、30日に連合軍司令官マッカーサーが厚木に到着、9月2日には横浜沖に停泊中の米戦艦ミズーリ号上で日本の降伏文書の調印式が行われた。当面マッカーサー一行は横浜を本拠地としたが⁽¹⁵⁾、9月5日頃から丸の内にアメリカ兵が多数やつてきて焼け残った建物を接収するための下見を行い、連合軍総司令部（以下GHQ）本部が入る施設として接収された第一生命館ビルを例とすれば、同月10日には日本政府から、地上全階を、15日午前を期限として明け渡すこととの正式な接収命令が下つた⁽¹⁶⁾。このようにして、焼け残った丸の内地区を手始めに、全国でGHQの進駐にともなう建物の接収が次々とすすめられていった（表3）⁽¹⁷⁾。

参考図は『GHQ東京占領地図』（雄松堂出版）掲載の「主要接収建物一覧」等により、丸の内地区を中心としたGHQによって接収された施設の分布を、その機能別に示したもので、左に各施設の接収前後の施設名、当時の住所、接収時期を記した対照表を付した。これを見ると、Ⅱのオフィスは丸の内二、三丁目に集中し、それを囲むように丸の内一丁目、内幸町周辺にⅢの宿舍ほか分布していることがわかる。また、接収時期については、丸の内の郵船ビルや銀行協会、本拠地となつた第一生命ビル、NHKの放送会館、帝国ホテルなどは終戦から1ヶ月足らずの9月の段階で接収が行われており、その後順次1947年ごろまでの間にさまざまな施設が接収



図3 進駐軍時代の銀座 占領施設及び娯楽施設の分布
岡本哲志『銀座—土地と建物が語る街の歴史』掲載図に加工

表3 米占領軍（第8軍）と駐屯地（1946年3月）

進駐部隊名	駐屯地	備 考
第 1 軍 団	京 都	
第 9 軍 団	仙 台	
第1騎兵師団 第1騎兵旅団 第5騎兵連隊 第12騎兵連隊	東 京 横 浜 淵野辺 小田原	
第2騎兵旅団 第7騎兵連隊 第8騎兵連隊	東 京 東 京 東 京	
第2騎兵師団 第2海兵連隊 第6海兵連隊 第8海兵連隊 第10海兵連隊	佐世保 宮 崎 福 岡 熊 本 長 崎	
第11空挺師団 第511歩兵パラシュート連隊 第187歩兵グライダー連隊 第188歩兵グライダー連隊	仙 台 盛 岡 札 幌 仙 台	1946.3.15.札幌へ移動
第24歩兵師団 第19歩兵連隊 第21歩兵連隊 第34歩兵連隊	岡 山 高 知 岡 山 姫 路	1946.3.英連邦軍と交代
第25歩兵師団 第27歩兵連隊 第35歩兵連隊 第4歩兵連隊	大 阪 岐 阜 大 津 大 阪	
第77歩兵師団札幌 第305歩兵連隊 第306歩兵連隊 第307歩兵連隊	札 幌 札 幌 札 幌 札 幌	1946.3.15.札幌へ移動
第97歩兵師団 第303歩兵連隊 第386歩兵連隊 第387歩兵連隊	熊 谷 福 島 大 宮 大 田	1946.3.31.解散

竹前英治『占領と戦後改革』より

された。接收解除の時期は施設によってまちまちだが、丸の内地区では8施設が講和条約締結から4年後にあたる1956年によく解除されている。

一方、9月初旬には早くもNHKラジオで軽音楽の時間が設けられ、それまで空襲警報と軍歌一色だったラジオ番組に潤いを与えた。また、GHQは接收した放送会館に9月22日に入り、CIE（民間情報教育局）の事務所を設置するとともに、NHKの第2放送を転

用して、GHQによる日本の進駐軍施設向けのラジオ放送、通称WVTR（後のFEN）を翌日から放送を開始した。帰還兵を歌った〈Sentimental Journey〉や〈Smoke gets in your eyes〉などのジャズ・ナンバーが連日放送された。また、同月、戦時中対米謀略放送⁽¹⁸⁾に出演していたメンバーを中心に、松本伸とニュー・パシフィック・バンドが結成され、10月からは各地のGHQの将校クラブに出演、12月2日からはNHKで毎週日曜日放送の「ニュー・パ

参考図 丸の内・霞ヶ関周辺 進駐軍 建物接收状況

I, 既存の施設の機能を利用

- ア) 東京中央電話局(一部)→民間検閲支隊 電話検閲班 46.1~52.10(大手町2-4)
- イ) 東京中央郵便局→郵便物検閲機関 外国郵便取扱 45.9~49.12(丸の内2-3)
- ウ) 放送会館→放送・出版・映画検閲機関 WVTH 45.9~53.8(内幸町2-2)
- エ) 東京宝塚劇場→占領軍専用劇場(アーニー・パイル・シアター) 45.12~55.1(有楽町1-12)
- オ) 日比谷公会堂→占領軍専用ホール(ヒビヤホール) 45.12~49.10(日比谷公園内)
- カ) 日比谷公園庭球場→占領軍専用野球場(ドウリットル・フィールド) 47.12~51.9(日比谷公園内)
- キ) 大音楽堂→東京ボール 46.7~51.6(日比谷公園内)
- ク) ニュートーキョウビル→連合軍将兵専用ピヤホール 46.9~52.4(有楽町2-4)
- ケ) 邦楽座→米軍専用劇場 46.9~49.3(有楽町2-3)

II, オフィス

- ア) 第一生命ビル→G.H.Q.本部 45.9~52.7(有楽町1-9)
- イ) 三菱商事ビル→G.H.Q.分室 46.1~52.4(丸の内2-10)
- ウ) 郵船ビル→翻訳通信部隊 参謀第二部 45.9~56.1(丸の内2-20)
- エ) 三菱本社→軍事郵便局 婦人部隊宿舎 46.1~56.1(丸の内2-4)
- オ) 仲十五号館(三菱電機ビル)→米第8軍下士官教習所 46.3~?(丸の内2-12)
- カ) 内外ビル(三井丸の内ビル)→英国犯罪捜査部 46.3~52.12(丸の内2-18)
- キ) 仲十一号館(千代田ビル)→極東軍事裁判所丸の内法廷 46.3~52.1?(丸の内2-14)
- ク) 明治生命ビル→極東空軍司令部 対日理事会ほか 46.4~56.7(丸の内2-16)
- ケ) 東七号館(新東京ビル)→進駐軍記者クラブ 46.4~56.3(丸の内3-2)
- コ) 仲八号館→G.H.Q.経済調査部 45.12~49.7(丸の内3-8)
- サ) 帝国生命館→米軍東京憲兵司令部 法務局 45.9~49.6(有楽町1-2)
- シ) 大正生命館→米軍空輸司令部 45.9~52.8(有楽町1-7)
- ス) 市政会館→G.H.Q.新聞・雑誌検閲機関 45.12~49.10(日比谷公園内)
- セ) 勸業銀行本館→G.H.Q.副官部? 46.1~53.11(内幸町1-1)

III, 宿舎ほか

- ア) 丸の内ホテル→英連邦軍関係者宿舎 46.10~49.7(丸の内1-1)
- イ) 住友ビル(ホテル東京)→貿易庁直轄バイヤー宿舎(丸の内1-2)
- ウ) 東京海上ビル(新館)→空軍将校宿舎 45.9~56.7(丸の内1-6)
- エ) 東京海上ビル(旧館)→米軍女子部隊宿舎 45.9~56.7(丸の内1-6)
- オ) 銀行協会→米第5空軍クラブ 45.9~56.7(丸の内1-8)
- カ) 八重洲ビル→米軍属宿舎 46.4~56.2(丸の内2-6)
- キ) 三菱二十一号館→ソ連軍宿舎 文化宣伝部 46.3~56.5(丸の内3-2)
- ク) 東京会館別館?→将校宿舎 46.3~48.12(丸の内3-12)
- ケ) 三信ビル→士官兵宿舎 45.9~50.6(有楽町1-10)
- コ) 松本楼→憲兵司令部宿舎 45.9~51.9(日比谷公園内)
- サ) 帝国ホテル→G.H.Q.将校宿舎 45.9~52.5(内幸町1-1)
- シ) 大阪ビル→婦人部隊宿舎 46.6~?(内幸町2-1)
- ス) 大蔵省→G.H.Q.将校宿舎 45.9~55.12(霞ヶ関3-2)
- セ) 華族会館→宿舎(ピアスクラブ)(霞ヶ関3-4)
- ソ) 第一ホテル→米軍高級将校宿舎 時期?(新橋1-32)



人文社復刻『地形社編 昭和十六年大東京三十五区内麹町区詳細図』の一部に加工

シフィック・アワー」にレギュラー出演することになった。このようにして、戦時中、レコードを所持することも禁じられていたジャズが、敗戦によって解禁となり、戦前からの軽音楽ファンが狂喜したばかりか、それまで接する機会が少なかった一般の国民もラジオ放送によってさまざまにジャズ・ナンバーを耳にするようになった。

また、戦時中演奏を禁じられていたジャズ・ミュージシャンたちも、GHQの進駐により、息を吹き返した。彼らの仕事場は、大半がGHQの娯楽施設、R A A⁽¹⁹⁾の娯楽施設であった。

前者は丸の内・銀座をはじめ都内の焼け残ったビルや旧宮家・華族の邸宅など接収された建物のほか、代々木のワシントン・ハイツ、成増のグラランド・ハイツなど米軍軍人・軍属の住宅地、赤羽、立川、所沢、朝霞などの基地のなかに将兵の娯楽施設として設置されるもので、以下のような種類があった。

- (ア) オフィサーズ・クラブ(将校)、(イ) NCOクラブ(下士官)、
- (ウ) EMクラブ(兵隊)、(エ)「エアメンズ・クラブ」(空軍)、
- (オ)「シビリアン・クラブ」(軍属)

上記のうち(ア)は将校が婦人同伴で訪れるため、上品なダンス・ナンバーが求められ、(ウ)では若い兵隊が多く、R & B、ブルース、ビバップなどエネルギーシユなナンバーが求められた。こうした曲のパート譜は各クラブに備えられており、曲を知らなくても楽譜が読めれば、現場での簡単な音合わせ程度でステージを務めることができた。(イ)、(ウ)はさらにアフリカン・アメリカン専

用クラブを設ける場合もあった。

クラブの出演者は、東宝など戦前からある芸能事務所のほか新興の仲介業者が手配した。丸の内・銀座界隈の各施設にレギュラーで出演したバンドは内田・大森によれば以下のとおり。

第一ホテル(米軍高級将校宿舎)

渡辺弘とスター・ダスターズ(1946年〜)

バンカース・クラブ(第5空軍クラブ)

多忠修とゲイスターズ(1949年〜)

レイモンド・コンデとゲイ・セプトット(1949年〜)

ニュー海上ビル(第5空軍EMクラブ)

新野輝雄とブライト・ヘッド楽団(1946年〜)

ロッカ・フォーククラブ

中村喜久三とシンコペターズ(1948年〜)

アーニーパイル劇場(東京宝塚劇場)

紙恭輔指揮アーニーパイル・オーケストラ(1949年〜)

アメリカ赤十字

後藤博とデキシランダース(1946年〜?)

丸の内界隈の高級なクラブは常にレギュラー出演者が確保されていたが、郊外のキャンプ内のクラブへの手配は、予算が少ないことやトラックで埃まみれになりながら移動しなければならないことから常に需要過多となっていた。そこで1946年ごろから東京駅北口、新宿駅南口、立川駅、横浜駅などの駅頭でその日のメンバー(急病等で欠員が出たパートのみ、又はバンド・メンバーすべて)

を仲介業者がその場で募って施設へ届ける、「拾い」というシステムが確立され、1957、8年まで、職を求める多くのミュージシャンがこれらの駅頭に集まった⁽²⁰⁾。

表4は創立当時の慰安施設の一覧で、このうちキャバレーやダンスホールにジャズ・バンドの需要があった。こうした施設でバンドは、ダンス音楽演奏のほか、ショータイムの踊りや演芸の伴奏も務めた。図3の銀座松坂屋地下のキャバレー「オアシス・オブ・ギンザ」がこれにあたり、大森によれば戦後間もなくにはジョニー・メンドツサとその楽団が、内田によれば1949年から新良晋一郎とスイング・ユースが出演していた。なお、R A A関連施設も含むGHQの娯楽施設への出演者は1947年から設立直後の「日本ミュージシャンズ・ユニオン」の役員（野川香文、紙恭輔、菊地滋也、渡辺弘、デイック・ミネほか）の審査による格付けが行われ、そのランクによって出演料が支払われた（表5）⁽²¹⁾。

こうした進駐軍向け施設に日本人は立ち入ることができなかった。しかし、銀座では図3のキャバレー「美松」、ダンスホール「マリーゴールド」、その他ダンスホールとして日本橋白木屋百貨店に「クラブシロキ」、東京駅八重洲口「サンタ・フェ」、東京クラブ、新宿「グランド東京」など日本人向けの娯楽施設にも専属バンドが入り、ジャズなどの軽音楽が演奏された⁽²²⁾。また、1946年4月には銀座で復興祭が行われ、焼け跡に設営された舞台上にジャズバンドも登場して、鈴なりの観客を沸かせた。

「ジャズと東京」のインタビュから

ここ数年の「ジャズと東京」にゲスト出演していただいたミュージシャンへのインタビューから、進駐軍時代のジャズに関する部分を中心として以下にまとめる。なお、敬称は略した。

(1) 谷山忠男 トロンボーン奏者（2002年3月の「ジャズと東京Ⅳ」に出演）

○少年飛行兵出身で高知県高岡郡の実家に戻っていた谷山は、1948年、海軍軍楽隊出身ですでにジャズ・トランペッターとして活躍していた兄の栄郎からの電報で上京し、ロッカ・フォー・クラブのバンドボーイの仕事 시작했다。楽器運びや雑用が主だが、初日には天才少女歌手として売り出し中だった美空ひばりのステージの照明係を任された。音楽といえは軍歌や流行歌という環境で育った谷山にとって、上京して初めて聴くジャズはカルチャー・ショックだった。

○バンドの雑用を務めながら谷山はトロンボーンを志すようになり、軍楽隊仲間で見と下宿をともにしていたトロンボーン奏者のジョー本多から軍楽隊払い下げのバス・トロンボーンを与えられて一から手ほどきを受け、池上本門寺の墓地で基礎練習に励んだ。1年後、将校宿舎として接收された東京会館のクラブでトニー小口バンドのセカンド・トロンボーンとしてプロ入りを果たし、その後さまざまなバンドで活躍。

○曲の練習はラジオ放送（WVTR）と下宿にあった3枚のVディ

表4 R.A.A.創立当時の慰安施設

地 区	名 称	慰 安 内 容	人数
京浜（大井・大森）	乙 女	慰安所 売春	22
	小町園	慰安所 売春	40
	悟空林	慰安所・	45
	(同上)	キャバレー ダンサー	6
	見晴らし	慰安所 売春	44
	やなぎ	慰安所 売春	20
	波満川	慰安所 売春	54
	楽々	慰安所 売春	20
	松浅	委託慰安所 売春	不明
	沢田屋	委託慰安所 売春	不明
福久良	委託慰安所 売春	不明	
品川・芝浦	パラマウント	旧京浜デパート ダンスホール ダンサー	350
	ゼブラクラブ	高級将校クラブ	不明
	東光園	慰安所・	10
	(同上)	キャバレー ダンサー	30
丸の内・銀座	オアシス・オブ・ギンザ	銀座松坂屋地下 キャバレー ダンサー	400
	東宝ビヤホール	ビヤホール	不明
	千疋屋	キャバレー ダンサー	150
	耕一路	キャバレー ダンサー	20
	メリーゴールド	旧伊東屋 ダンスホール ダンサー	300
	録々館	キャバレー ダンサー	50
	工業クラブ	将校用レストラン	不明
	ギルドー	バー	不明
	エーワン	ダンスホール	不明
	日勝館	ビリヤード	不明
向島・小岩	大倉別邸	高級将校用レストラン	不明
	鳩の街	慰安所（30軒） 売春	60
	ピジョンストリート		
	東京パレス インターナショナル パレス	元精工舎女子工具寮 慰安所・ 売春 ダンスホール ダンサー	不明 不明
板橋・赤羽	成増	慰安所 売春	50
	板橋	接待所	
	子僧閣	キャバレー ダンサー	100
三多摩	セブンマイルハウス	二子玉川 二子亭 オフィサーズクラブ	不明
	福生	慰安所 売春	54
	調布園	慰安所 売春	57
	楽々ハウス	慰安所・ 売春 キャバレー ダンサー	65 25
	立川バラダイス	慰安所・ 売春 キャバレー ダンサー	14 50
	立川小町	慰安所 売春	10
	ニューキャッスル	慰安所・ 売春 キャバレー ダンサー	100 150

永井良和『社交ダンスと日本人』より

表5 格付審査委員会が決めた演奏料金
(1947年発足当時1人あたり)

ランク	最初の1時間	+1時間ごとに
SA	380円	110円
SB	320円	90円
A	290円	90円
B	180円	90円
C	150円	90円
D	110円	90円

内田晃一『日本のジャズ史戦前戦後』より

○兄の武要は戦後、バンドボーイを

ともあった。
 ○東京都中央区八丁堀の寄席「聞楽亭」で生まれ育った五十嵐は中学受験のため、埼玉県日進の学童集団疎開先から帰京直後の3月10日未明、東京大空襲で被災し、講釈師神山山陽の葉山の別荘へ疎開。幼少時は八丁堀の自宅から東京駅に汽車を見に行ったり、夜店をたどって銀座通りまで遊びに行くこともあった。

(3) 松崎龍生 ビブラホーン奏者(2005年11月の「ジャズと東京Ⅷ」に出演)

○1951年、「サックスを吹けるようになったらうちのバンドに入れてやる」とバンドマスター(松下彰孝)に言われて練習し、渋谷道玄坂の「フォリナース・クラブ」に出演中のメトロトーンへ。進駐軍将兵専用で日本人は立ち入れなかったが、当時修行中の渡辺貞夫が、店の裏で毎晩演奏を聴いていた。週末は夜明けまでジャム・セッションが行われ、仕事を終えたミュージシャンが訪れた。

(2) 五十嵐明要 アルトサックス奏者(2005年2月の「ジャズと東京Ⅷ」に出演)

スク(23)だけが頼り。そのうちの1枚がトミー・ドーシー楽団のテーマ曲〈Im getting sentimental over you〉で、難曲だったが猛練習の末克服し、後年この曲が谷山の十八番となる。
 ○1950年代、ジャズ・ミュージシャンは若者ファッションのリーダーであった。細身のズボン、肩幅の張った「カモイ」(洋服屋)のジャケットが主流だった。洋服屋は採寸、支払い(分割払い)から商品の受け渡しまで楽屋で行う(24)。「カモイ」でユニフォームを揃え、支払いが終わる頃バンドがつぶれて解散になることがよくあった。このほか楽器や楽譜を扱う業者も楽屋を訪れた。

経てジャズ・ドラママーに。五十嵐は高2の夏(1948年)、丸の内ホテルでバンドボーイのアルバイトを始めた。このときのバンドはアコーディオンなど小編成で、それほど広くない食堂で演奏していた。そのバンドのサックス奏者に勧められてクラリネットを給料3ヶ月分の1500円で買って練習した。Vディスクやラジオを聴いて、〈Rose room〉〈Now is hour〉等の曲を憶えた。
 ○その後兄が所属していたウエスタン・バンドのバンドボーイとなった。ある日バンドマスターが東京駅で1日だけのクラリネット奏者を捜していたギター奏者の植木等に五十嵐を紹介し、歌舞伎座裏のキャバレー「エデン」のダンス・バンドへ(「拾い」の仕事)。「数曲吹いたら後は邪魔しないで立っていてくれ」といわれたが、気に入られてそのまま雇われ、2年在籍。バンドのトランペット奏者に楽譜の読み方などを習う。

○暁星小学校5年生のとき、ブラスバンド部でトランペットを担当。1944年に父が、1946年に母が亡くなったため、戦後すぐ東宝の専属だったラッキー・パピー・オーケストラにトランペット奏者として入団し、箱根、琵琶湖、蒲郡、金沢など進駐軍に接収された地方のホテルや基地を廻った。当時は「ただ座っている」と言われた。

○日本人オフ・リミット（立ち入り禁止）の1、2等車両に乗ってゆったり移動した。日本人の乗る一般車両は買い出し等で超満員だった。車両間で米軍から支給されるサンドイッチなどの食料と日本人客が持っている握り飯を交換することもあった。

○名古屋のNCOクラブのバンドにいた頃（1948年頃）、ジョージ・シアリング・スタイル（ビブラホーン、ギター、ピアノ、ベース、ドラムスというバンド編成）が流行した。当時、日本にはビブラホーン奏者は少なかったが、この時期、どこのバンドでもビブラホーンを導入した。松崎がいたジャズ・バンドでもバンドマスターが楽器を購入し、トランペット奏者だった松崎に、「お前やれ」と命じた。これをきっかけに転向し、最初に憶えた曲は〈Mona Lisa〉だった。

おわりに

戦前の東京において、ジャズ・タンゴなど、ポピュラー音楽が演奏される場合は、ダンスホール、映画館、レビュー劇場などであった。また、昭和初期、レコードはソフト面では電気吹き込み式が主流と

なり、ハード面では電気蓄音機が登場したことから音質が飛躍的に向上し、ジャズ等の洋楽を流すカフェーや喫茶店が流行した。その他ラジオ放送もあったが、こうした音楽を愛好するのは、社交ダンスやカフェーなどモダン文化を嗜好する文化人、芸術家、丸の内周辺のサラリーマン、学生などが中心だった。

戦時中のジャズ撲滅体制を経て、終戦後にはGHQの進駐により一転、ジャズを中心としたポピュラー音楽がラジオから流れ、ミュージシャンの需要も急速に高まった。ジャズを愛好する階層は戦前より広がり、ミュージシャンの数も急増した。それまで敵視されていたアメリカ文化が一気に流入し、もつとも早くその恩恵を受けたのは、進駐軍接収施設のクラブ等で演奏をしたジャズ・ミュージシャン達であったともいえる。今回は、都内の進駐軍接収施設の分布を概観し、クラブやダンスホールにおいてどのようにジャズが演奏されていたのか、ミュージシャンへのインタビューからその一端を紹介した。こうした進駐軍接収施設のクラブやダンスホールの構造や間取り、そこでのジャズ演奏の内容、ミュージシャンの生活などについての検討を今後の課題としたい。

やがてジャズ・ミュージシャンは若者のファッション・リーダーともなり、1950年、当時の人気バンド、ゲイ・セプテットが行った日劇連続公演は若年層のファンで埋め尽くされ、1950年代前半のジャズ・ブームへとつながっていく。

【註】

- 1 内田晃一 1976
- 2 永井良和 1991。赤坂溜池の「フロリダ」では、菊地滋弥のジャズバンド、パリから来たムーラン・ルージュ・タンゴ楽団などが活躍した（瀬川昌久 2005）。その他、「国華」ではビリーコンデのバンド、「和泉橋」では後藤純のバンド、「新橋」では南里文雄とホットペッツパイズ等が出演していた（大森盛太郎 1986）。
- 3 佐々木守 1997によれば、当時の映画館にはスクリーンの前にオーケストラ・ボックスがあり、弁士の説明に合わせて音楽を演奏した。数名の編成が多かったようだが、20名のバンドを抱える映画館もあった。しかし、1929年（昭和4）にトーカー機材の導入により、まず洋画専門館から弁士と楽士の解雇が始まり、1931年には邦画のトーカー第1号となる「マダムと女房」が公開され、1933年頃まで多数の楽士が解雇され、ある者はトーカー映画音楽作曲・演奏へ、また放送局等のオーケストラへ転身をはかったが廃業する者も多かった。（大森 1986）。
- 4 たとえば、榎本健一が二村定一とともに1931年（昭和6）暮れに結成し、翌年7月から松竹の専属となった劇団「ピエル・ブリヤント」の全盛期にあたる1930年代半ば、劇団の専属バンドはトランペット3、サククス3、バイオリン2、ピアノ、ベース、ドラムス、ギターという本格的な編成であった
- 5 今和次郎 1929
- 6 マイク・モラスキーは、この曲がヒットしたもうひとつの原因として、「ラップ吹き込み」方式でなく、最新録音技術である「電気吹き込み方式」で行われたため、レコードの音質が急激に良くなったことをあげている。
- 7 初田亨 1993
- 8 榎本健一が率いるレビュー劇団「ピエル・ブリヤント」のファン向け雑誌。1934年3月に創刊され、1937年ごろまで刊行されていた（ただし、病气や映画撮影でエノケンの舞台公演が休演される月は刊行されていない）。
- 9 『月刊エノケン』創刊号（1934年3月号）〜同年6月号
- 10 宮間利之・瀬川昌久 1993。「日比谷公園の前の角のビルに（瀬川 前掲書）。その実力は、1935年（昭和10）8月公演のオペレッタ「大西洋孤踏曲」のなかにジョージ・ガーシユイン作曲でポール・ホワイトマン楽団が1925年に初演して話題となったピアノ協奏曲「ラプソディ・イン・ブルー」のサワリを導入したことからわかる。これは、ジャズのフィーリングで演奏するクラシックスタイルの曲であるため、戦前、3回しか演奏されなかった難曲だが、当時の専属バンドには、この曲の日本での初演を経験しているメンバーが6名いたため、エノケン・レビューの舞台上での演奏が可能となった。また、作・編曲には当時アレンジの大家といわれていた池譲が起用された（松井かおる 2003）。

- あつた美松」、「日本橋白木屋の裏にあつたエリントン」
- 11 内田 前掲書
- 12 2月15日から3日間で3486人が検挙された(『近代日本総合年表 第4版』岩波書店)。
- 13 瀬川 前掲書
- 14 岡本哲志 2003
- 15 犬丸一郎 1968によれば、帝国ホテルは戦時中から外務省と大東亜省専用の部屋があつた関係で、8月20日には、外務省から、進駐してくるマッカーサー一行3,000人あまりが横浜に滞在するための宿舍探し、家具調度食器類調達等を依頼されたという。
- 16 矢野一郎 1979
- 17 竹前英治 1988によれば、在日占領軍の数は、当初アメリカ軍約50万人、その後次第に規模を縮小して1948年、本土では約10万人余となつたが、朝鮮戦争のころ再び増加し、1951年末には26万人であつた。
- 18 内田 前掲書によれば、1941年(昭和16)の日米開戦とともに、参謀本部の指導のもと、NHKは戦線の連合軍將兵向け謀略放送を始めた。当時の日本で最高のミュージシャンが揃つていたコロムビア・ジャズ・バンドを主体とした楽団(コロムビアの楽長、渡辺良二ベース、角田孝二ギター、フランシスコ・キーコピアノ、松本伸ほかサククス、森山久トランペット、レイモンド・コンデほかクラリネット)によつて、
- 21 格付け審査の実施と出演料の支払いは、当初は外務省の下部機関である終戦連絡中央事務局が行い、1949年からは特別調達庁が行つた。また、特別調達庁による格付け審査は翌年5月限りで廃止され、その後は審査を受ける必要がなくなった(内田 前掲書)。ただし、大森盛太郎1987には、特別調達庁への移管時期は1947年であり、当時の格付けは甲・乙・丙・丁・戊であつたとしている。さらに、1949年の改正で格付けをSA・SB・A・B・C・Dとしたと述べている。この点については、今後、調査をすすめて実態を明らかにしたい。
- 22 永井 前掲書
- 20 東谷護 2005、内田 前掲書。なお、当館所蔵の1947年から48年のアーニー・パイル劇場週間スケジュールを見ると、2日から4日連続で当時の人気バンド(アズマニアン・スイング・バンド、ニューパシフィック・オーケストラ、ゲイ・クインテット、ジュン後藤スイング・バンド、スター・ダスターズ・オーケストラ等)が単発で出演している。
- 19 RAA(リクリエーション・アミューズメント・アソシエーション)は「特殊慰安施設協会」の略称。関東地区に駐屯する占領軍將校・一般兵士の慰安施設を設置する目的で日本政府が設けた組織。終戦直後の8月21日に設立が閣議決定された。
- 18 ジャズ風の楽しい曲をアメリカ向け短波放送で流し、1943年頃からは、スタンダード曲にのせて敵兵の戦意をそこなうような歌詞を二世の森山久などが歌うというものだった。

23 米軍の慰問用レコード。Victory Diskの略称。接收された施設には常備されていた。

24 この時共演したミュージシャン（ベース奏者遠山晃司、ドラムス奏者木村由起夫）は谷山の一世代下の年齢だが、カモイにユニフォームを注文したことがあるという。大森1986によれば、「鴨居」は戦前からダンスホールの楽屋に出入りして・タキシード等の注文を取っていた。

参考文献

- | | | | | | |
|-------|------|--------------------------------|-----------|------|---|
| 犬丸 一郎 | 1968 | 『帝国ホテル』毎日新聞社 | 東谷 護 | 2005 | 『進駐軍クラブから歌謡曲へ 戦後日本ポピュラー音楽の黎明期』みすず書房 |
| 内田 晃一 | 1976 | 『日本のジャズ史 戦前戦後』スイングジャーナル社 | 永井 良和 | 1991 | 『社交ダンスと日本人』晶文社 |
| 大森盛太郎 | 1986 | 『日本の洋楽〔1〕』新門出版 | 初田 亨 | 1993 | 『MAX ALBUM 18カフェーと喫茶店 モダン都市のたまり場』 |
| 同 右 | 1987 | 『日本の洋楽〔2〕』新門出版 | マイク・モラスキー | 2005 | 『戦後日本のジャズ文化 映画・文学・アングラ』青土社 |
| 今 和次郎 | 1929 | 『新板大東京案内』中央公論社 | 松井かおる | 2003 | 『月刊エノケン』にみるピエル・ブリアントの日々』『エノケンとへ東京喜劇』の黄金時代』論創社 |
| 岡本 哲志 | 2003 | 『銀座―土地と建物が語る街の歴史』法政大学出版局 | 宮間利之・瀬川昌久 | 1993 | 『日本の40年代（対談）』『季刊ジャズ批評』80号 ジャズ1940年代 フィーチュアリング・ビバップ』ジャズ批評社 |
| 佐々木 守 | 1997 | 『ジャズ旋風 戦後草創期伝説』三一書房 | 矢野 一郎 | 1979 | 『第一生命館の履歴書』 |
| 瀬川 昌久 | 2005 | 『舶来音楽芸能史 ジャズで踊って』増補決定版 清流出版 | | | |
| 竹前 英治 | 1988 | 『岩波ブックレット シリーズ昭和史No.9 占領と戦後改革』 | | | |